



西成特区構想について「定例まちづくりひろば」で出された意見 の紹介

釜ヶ崎のまち再生フォーラム（ありむら潜）

▼開催日<1> 2012年5月8日(火) 18:30~20:45

▼西成市民館 3階講堂

▼主催:釜ヶ崎のまち再生フォーラム

▼参加者 45名 (予想を超えて、たいへん多くの方々が集まった。やはり関心が高いことを証明)

【テーマ】

“西成特区”(≡あいりん特区)構想をめぐる最新報告と大討論シリーズ <その1>

これにどう向き合うか考えあおう。そして、提案をぶつけよう—釜ヶ崎の街の「どうしても守るべきもの」「その良さを継承発展させたいもの」「新しく付け加えて育てたい、うんと夢のあるもの」

～「仮称萩之茶屋まちづくり拡大会議」の取り組みの報告を軸に～

報告者:

寺川政司さん(仮称萩之茶屋まちづくり拡大会議の事務方。CASE まちづくり研究所)

ありむら潜さん(釜ヶ崎のまち再生フォーラムからの提案)

その他、現在取り組み中の方々

▼開催日<2> 2012年6月12日(火) 18:30~20:45

▼西成市民館 3階講堂

▼主催:釜ヶ崎のまち再生フォーラム

▼参加者 33名

(この中には、議員さんや隣の弘治小学校区に住む女性等も。「隣りなのに全然情報集まらないし、自分で足を運ばないと。こういう「ひろば」のようなしなげもないので・・・」とのこと)

テーマ

“西成特区”(≡あいりん特区)構想をめぐる最新報告と大討論シリーズ <その2>

○報告:「戸惑い」状況から「一致して提案できる項目づくり」へ

⇒『5つのまちづくりプロジェクト案』(仮称萩之茶屋まちづくり拡大会議)の内容

○逆に、地域中からの提案を大募集(そのためのしなげが当『まちづくりひろば』)

報告者:

『仮称萩之茶屋まちづくり拡大会議』参画団体

子ども支援団体・若者就労支援団体等の各関係者。

大阪市職員労組「釜ヶ崎まちづくり」ワーキングチームのメンバー

その他、現在取り組み中の方々

【合意の形成など、まちづくりのプロセスに関する意見。いろいろな力を合わせる課題】

○阿倍野再開発では話し合いの場、機会すらなく進んでいって、ああいう風になった。絶望的になる。しかし、今回当地域はまだ新しいものを創りつつあるのではないかな。こうして我々も話し合う場にいるのだから。

○いろいろな立場や意見の違いをどう乗り越えるか。基本は「この街にとって何が良かったら良いのか」。(おっちゃんたちのことであれば)「何が良かったらおっちゃんたちの生きがいになるのか」。そういう考え方にすると答えはシンプルに出てくるはずだ。

○議論は「地元が一致団結できるものは何か」にしばられていくのではないかな。その点、「子供」はすでにOK。生活保護はウィン・ウインの関係での答えを見つければいいのではないかな。

○特区構想論議はまず市や西成で固めている。府や警察が議論の場からはずれているのは、大きな問題だ。そして、警察が何も動いていない。警察がまちづくりに協力しないと、覚醒剤撲滅も、屋台村創設も進まない。

とにかく警察本部長に関係会議の席に座ってもらわないとダメだ。そのためには、結局は世論が圧力をかけること。そのために、橋下市長から発信してもらおうのも手だ。国や国会議員にも協力してもらわな

いと。

○そうした議論や決定の過程で、地元の声が一番遠くに置かれている状況なので、今後の動きをたいへん危惧する。今はとにかく地元が声を固めること、そして自ら提案していくことがとても重要。しかも早くやらないと。

○そうだと思う。今大きな住民合意ができておけば、ポスト橋下の段階になっても、揺らぐことはない。こちらは将来も住み続ける、あるいは働き続けるわけだから。

○（西成特区をめぐるこの間の動きの中で）医療現場の声は届いていかない構図だ。西成医師会などは実は前向きなのに。有識者座談会のオブザーバーとして呼ぶ必要があるのではないか。ただし、生活保護のテーマの中などでやると悪役になってしまうので、そこは配慮し、別な方法でも。

○まちづくり団体である再生フォーラムとしては、市長や区長が住民参加のプロセスを大事にされるよう求めたいし、そのために自分たちも力を尽くしたい。確かに25年度予算編成とスピードを競わねばならない状況は理解する。しかし、そうした特殊な状況下でも、できることはやらないと。なぜなら、①広く英知を集めることこそが特区構想の中身を豊かで適正なものにする。②あいりん地域外の区民や他区の「えこひいき」される側の市民の理解も得る必要がある。③なによりも、右肩上がり経済が期待できない今後において、特にあいりん地域などは「ささえあいの街」を目標の一つとするしかない。今後も引き続き住民や関係者の協力を得ないとそれはできない。ならば、住民合意をしっかりと確保することをやらないと。99年以後、あいりん地域では実はどの街よりも合意の形成と積み上げに心血を注いできた街である。⇒「有識者座談会への報告書1」参照

【いわゆる移行期問題について】

○20年～30年先を考えるという夢のある話も良いが、課題がある。身動きができない単身高齢者たちの居場所は？ 集客で外から人がいっぱい来るということはその視線にさらされるということ。そういう想定は（PTや有識者会議等では）どうなっているのか。そういう人たち用の施設はどうなるの？ 簡宿からアパートへ転業したように、モノを持っている人たちはどう対応していくのか。その善意だけにまかせておいていいの？ 20～30年先のビジョンをといるのなら、夢に近づく前に、現にそこにいる人たちへの違う段取りも必要だろう。（これまで出されている構想の中身では）世間からハンディキャップを持った人たちがやってくる、この地域に残るようになるが、それによって釜ヶ崎はそうした人々の存在比率が違ってくる（濃い）問題が出てくる。住民にとっていいことばかりではない。

○有識者座談会では鈴木座長のテキストに「過渡期の行程表」的な表現で、将来の課題と現在の課題の両側面への同時的取り組み方針が述べられている。

○グローバル経済に組み込まれるほどに、地域での貧困がよりはっきり見えてくるというある社会学者の指摘がある。社会的困難者も増える。そうならば、今後は大きくは、互助のシステムで社会資源を利用する方が効果があると思う。

【生活保護について】

○働ける人には仕事を出したらよい。生活保護予算を（特掃型の公的就労のような）仕事出しに使うことができ、「仕事という現物支給」を実現できれば画期的。「特区」という位置づけを活用したら可能性がある。

ただ、こういう問題はほんとは生活保護の枠内にとどめない方がむしろよい。資金源は雇用保険の特別積立金でもよい。労災9兆円、雇用保険4兆円で計13兆円もある。

○突破の壁はやはりかつての失対事業への抵抗感だろうが。それと、それができれば、問題は西成へみんな集まってくるのだ。

【子育て世帯の呼び込み】

○いきなり子育て世帯（の誘導）は無理がある。その前に、若者に来てもらうことだ

○私たちはアートNPOだが、西成はアート活動するうえでとても魅力的なところだ。アーティストは来ると思う。

【統合後の萩之茶屋小学校跡地利用について】

○ここは人生の選択肢を広げられなかった人たちの街だ。あらためてそれができるようにする場としての学校が必要だと、昔から考えてきた。たとえば、若い母親が働くマナーを身につける必要がある。そうした「社会人大学」にすることを提案する。

○(萩小跡地を若者の就労等支援のしくみづくりなどインキュベート施設にする案に関連して) 日頃、あいりん地域等へやってくる就労困難な若者の自立支援の仕事をしている。一人で30~40人をサポート中。対象は30歳代が多いが、10%は児童養護施設経験者、10%は半虐待経験者だ。つまり、そうした幼少時の傷が手当されないで、そのまま30歳~40歳台になってしまった人たちが目立つ。60歳代の高齢労働者たちは右肩上がり経済の中で居場所を見つけたことが今だからわかる。ギャンブルも含めて、アディクション(依存症)に耐えられるような(力を学ぶ)しかけが要る。一般の人も入れるような勉強活動だ。当事者が自己表現できるような場だ。彼らはきちんと夜を過ごしていない。自分を持て余している。誰かとの関わり方ができない。それができるような勉強会がそこでは必要だ。

○(若者の就労支援施設の運営者) 彼らにはソーシャル・ビジネスとか中間市場が必要。うちでは、調理室で弁当をつくって、館の利用者に販売している。野菜や古着も街角で販売している。そういうことを経て(階段を)一つひとつ上がることで、劇的に変わる実例を見ている。ボランティアも、地域の中にいろんなニーズがあるので、そういう人たちに(やってもらっている)。初めはボランティア、そして有償ボランティア、やがてコミュニティ・ビジネスというステップを上げる。(萩小跡地で)新しい事業を起こすのであれば、インキュベーターの人材を配置したらどうか。

【子供の問題について】

○3校統合でできる小中一貫校はここ今宮が大阪市内では(矢田、中島について)3カ所目だ。地元でチェックしていかないと、(学校選択制の実施も併せると)4~5年先は地元の子が排除される懸念がある。○萩之茶屋小学校もかつては児童が1000人いた。それがほとんど他地域へ出て行って、この地域には戻ってきていない。今、100人以下だ。どうやって戻って来さすかが問題だ。ハードの面を整えてささえつつ、今からの取り組みが必要。

○この「定例まちづくりひろば」では、萩小やあいりん小中学校の卒業生たちにここに来てもらい、語ってもらうことも2~3年前からやり始めた。この街で育った子供たちがこの街に戻って活力になってほしいというメッセージは何かにつけて送り始めたところだ。今後はもっと本格化を。

○(子供支援施設のメンバー) 子供たち自身が(大人たちの)こういう議論を経験することが必要。自然発生的には起こらないので、しかけが必要だ。(住民の力で昨年オープンした)「こどもスポーツひろば」はその一つとして重要だ。いろんな人が集える場所が必要。私たちは西成で“あそぼパーク”事業をやっている。すると、その中でこの街の日雇いのおっちゃんたちが(設営等を)手伝ってくれたりして、(自然で楽しい)交流をつくれる経験をしている。

【障がい者就労支援制度】

○(アルコール依存症へ取り組む施設の職員) 市から仕事を請け負う際の契約制度が変更されたが、私たちの施設の障がい者だけでは取りたい掃除現場を背負いきれないので(相対的に力のある)ホームレス支援団体等が障がい者団体と一体となって(組み合わせで)請けられるようにしてもらいたいへん助かるのだが。それが釜ヶ崎では「地域特性を生かす」というかたちになる。